

俳句誌

八月号



花鳥諷詠

8月号 (437号)

日本伝統俳句協会

花鳥諷詠[®]

令和6年8月 ■ 第437号 ————— 目次

花鳥諷詠選集	岩岡 中正	4
	古賀しぐれ	4
この人の作品	小川 則子	7
一頁の鑑賞	石井 宏幸	8
	新家 月子	9
卯浪		10
虚子研究 『六百五十句』 研究 (54)		11
虚子生誕一五〇周年記念オンライン講座		
「俳人高浜虚子の出発～明治中期の足跡をたどる」レポート		
	吉岡 簾子	18
受賞者に聞く 協会賞「阿波踊」		
	勝村 博	20
令和五年度第三十七回通常総会の報告		22
風報		24
ベルギー文化交流会		29
新刊紹介		30
地区行事開催日程表		31
編集後記		32

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

表紙 虚子輯『さしゑ』より「つり」中村不折画

花鳥諷詠選集

岩岡中正選

特選五句

草笛を吹き文学を志す

福岡塚田由美

山よりの水を大事にして田植

熊本渡邊佳代子

春光をころがして来る人力車

倉敷中田鈴江

葉桜や神にさゝげる宮芝居

大阪大町久美

かく癒えて草笛吹いて見せにけり

白岡小林カヨ子

二句短評

一句目「草笛」と「文学」の取り合わせが、いかにも若々しく新鮮。もちろん自分なりに文学を志した若い頃への郷愁とも読めるが、他方、やや年をとってこれからの余生を文学に打ち込みたいという句として、共感ももてる。「草笛」に心引き立つ思いがする。二句目「一見ふつうの「田植」の句だが、ここは峡の田か。川からの水をたつぷり引いた広々とした水田ではなく、山から大事な水を引いた田。代々水を大切に稲作をしてきた誠実な暮らしぶりが見えるような一句である。

入選六十句

藁着せて小諸藁のほつこりと 長野 鈴木しどみ

野の梅にたたずめばみな詩人かな 香川 福家 市子

みづうみへひらく艇庫や風薫る 高崎 吉井たくみ

花見して楽し句会をして楽し 稲城 福島テツ子

花は葉に一行記す日記帳 宇部 上田久美枝

春昼やゆつくりと鳴る掛時計 鳥取 西村 史子

母の日や母より受けし吾が長寿 熊本 隈部 輝子

水脈長く曳きて五月の出船かな 出雲 谷 すみれ

多羅葉につけし爪跡春愁 鹿児島 松永 素子

飛魚や婚約告げに帰る船 堺 山戸 暁子

水音のして風音のして桜 姫路 大谷 千華

もう汐が来たかと馬刀の頭出す 荒尾 大川内みのる

ねぢり花まだまだ続く反抗期 堺 新田佐代子

声の良く透る児のゐる磯遊 横浜 松永 朔風

蜜蜂の仁王の口を巢としたる 大阪 山内 繭彦

目の合うて風と消えけり鬼やんま 京都 本谷眞治郎
 日本に天守閣あり花の山 浜田 田中 静龍
 芽柳の風にほぐれてゆく会話 福岡 黒田 純子
 独り居の旅愁にも似て春の雨 福岡 山口 裕子
 遠目にも筍掘りの鋏光る 北九州 吉富 堯峰
 せつせつとなほ切切と青葉木菟 神戸 田中あかね
 白雲へ初夏の櫂のまつしぐら 東京 勝又 洋子
 湿原の目覚め明るき水芭蕉 倉敷 鴨井 愛子
 卯波立つ壱岐に小さき曾良の墓 福岡 杉原久美子
 山といふ形整へゆく若葉 宇部 永田 芳子
 桜咲く倭国元より詩の国 糸島 小河美紗子
 風車遠き記憶のセルロイド 福岡 棚瀬 弥生
 番台に一束もらふ菖蒲風呂 市川 抜井 諒一
 一掬の光を手繰り糸を取る 泉大津 多田羅紀子
 春光にぐいと棹さすどんこ舟 鳥栖 西山 惠二

風船に引つ張られゆく縄電車 箕面 須知香代子
 日曜の小昼に母の蓬餅 石川 水橋眞智子
 絵本繰るごと車窓より花菜畑 神戸 岩水ひとみ
 水音の高くなり来し草若葉 羽生 樋口レイ子
 囀に日々満たさるる山仕事 西宮 宮本 露子
 葉桜の影の深さに憩ひをり 姫路 上原 康子
 長女より次女の逞し姫女菟 福岡 服部 朝子
 麦の秋古墳を三つ尖らせて 藤岡 清水 静子
 万緑におぼれさうなる伽藍かな 高島 貫野 浩
 魚屋の貝が潮吹く薄暑かな 大牟田 石橋 武子
 気遣つて呉れある母の日の視線 太宰府 柴田慧美子
 軽暖や男も使ふ油紙 鳥原 三好 立夏
 矢車の反転の時風変はる 大阪 ふじもと言葉
 薔薇園の一時間とは瞬く間 芦屋 長安 悦子
 万緑を抜けきて音となる流れ 堺 杉山千恵子

地下街を出て春風の集ふ花舗	西脇	岸本	悦子
ゆるやかに刻の過ぎゆく花あやめ	千葉	鈴木真沙枝	
知らぬ子と並んで覗く蝌蚪の水	八王子	小町谷滋子	
一山へ鐘つき放つ遍路かな	阿南	谷川	宗和
昭和の日旅のランチのナポリタン	鹿児島	亀割	芙蓉
妻籠路の雨に真白き山法師	磐田	金田みな子	
りゆうりゆうと風新しき鯉のぼり	熊本	木村佐恵子	
朴の花大きな息を天に吐き	川崎	飯川	三無
真つすぐに真つ正直に今年竹	宇部	正司	道子
思ひきり朱き喉見せ燕の子	松原	吉村美穂子	
天上に泰山木の花の燭	鹿児島	永井	紀子
さらさらと風に棟の花の音	高知	大川	房子
葉桜や無言で通る人ばかり	岡崎	新家	正美
柿の花こはさぬやうに掃きよせる	熊本	吉田	潮
納骨を終へ朝顔の種を蒔く	鹿児島	永里	瑞代

●古賀しぐれ選

特選五句

能登上布再開の報風薫る

神戸片岡橙更

軽暖や男も使ふ油紙

島原三好立夏

古来より藍から藍に更衣

泉大津多田羅初美

雨払ふ佳境に入りし祭笛

大牟田森永清子

父の書架在りし日のまま昭和の日

大分橋本照子

二句短評

一句目——地震により地場産業が大打撃を被った能登。「輪島塗」「九谷焼」などの伝統産業と共に「能登上布」も生産が覚束なくなつて久しい。まだ緒についてばかりであるが、薫風の候、能登上布生産の報が入つたことを共によこびたく思う。

二句目——「油紙」は油分をとりべたつきを押さえるもの。最近では男性も油紙を使う世となつたのだ。やや暑さを覚える「軽暖」のころ。油紙で顔を整えて、いざ商談へ。現代の世相を捉えた面白い発想の一句である。

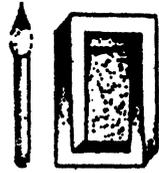
入選六十句

筆本の墨のにじみやさくらの夜 幸手 中野 典子
 ふるさとの思ひ解くかに笹粽 富山 高城 玲子
 鯉にそふしづかな波紋杜若 箕面 田村 文代
 蜥蜴顔出して太古の石の相 鳥取 長安 節子
 吊橋の右も左も朴の花 長岡 榎本清津子
 飛魚や婚約告げに帰る船 堺 山戸 暁子
 だぶだぶの制服歩く柿若葉 総社 劍持 章子
 水音のして風音のして桜 姫路 大谷 千華
 ガラス窓磨き吉野の朝桜 福岡 野口 明子
 行春や地震の復興ままならず 福岡 梶原 敏子
 蜜蜂の仁王の口を巢としたる 大阪 山内 繭彦
 囀の中へ写生子散らばりぬ 八尾 米澤 悦子
 復興を支へタンタン花に逝く 神戸 堅田サチエ
 風光る初出場のユニフォーム 神戸 上岡あきら
 佐渡行きの船遠ざかる波止薄暑 上越 板垣 柳子

辞書引いてまた湧く疑問薔薇の窓 鹿児島 青野 優子
 万緑に生き抜く力授かりぬ 福岡 西村 榮子
 帰省子と墓所ある丘の風に立つ 松山 篠原みどり
 風車渦に見入れれば魅入らるる 福岡 有田真理子
 白雲へ初夏の櫂のまつしぐら 東京 勝又 洋子
 山といふ形整へゆく若葉 宇部 永田 芳子
 桜咲く倭国元より詩の国 糸島 小河美紗子
 山ばかり見て海知らず葱坊主 熊本 井芹真一郎
 転がりし丸太も遊具風薫る 加賀 出島 達子
 番台に一束もらふ菖蒲風呂 市川 抜井 諒一
 一掬の光を手繰り糸を取る 泉大津 多田羅紀子
 海見ゆる花見ゆる玻璃ティータイム 生駒 南 純子
 薔薇園の香に酔ひ名にも酔ひにけり 東京 不破 澄子
 春愁や人疎ましく人恋し 高松 大山 孝子
 ふらここや風になりたき少年よ 神戸 涌羅 由美

兵に生き遺骨なき墓飛花落花 安来 細田 洋子
 夏霧や汽笛の遠く沈みゆく 横浜 永澤 功
 青畳に椅子の座もあり古茶新茶 浜田 鹿田かおる
 亀鳴くや古墳は時を遡る 香川 佐藤美沙子
 みちのくの花から花へ喜寿の旅 鹿児島 西村正一郎
 薔薇園の一時間とは瞬く間 芦屋 長安 悦子
 村中が田水の鏡夏きたる 阿南 鎌田 黄鳥
 飛花落花ひろぐる風の絵巻かな 熊本 宗像 和子
 知らぬ子と並んで覗く蝌蚪の水 八王子 小町谷滋子
 昭和の日旅のランチのナポリタン 鹿児島 亀割 芙蓉
 誰も美し薔薇のアーチを潜る時 名古屋 中野ひろみ
 一山に棲む今生の青蜥蜴 立川 日置 正樹
 真つすぐに真つ正直に今年竹 宇部 正司 道子
 渾身の一步若芝踏む幼 京都 大黒ひさゑ
 あふれしむ万の薔薇の香カフェテラス 加古川 長谷川美幸

風薫る伊予蛮カラの虚子の町 高松 藤田 敦雄
 母さんが誰より夢中石鹼玉 高松 織田 雅子
 百歳は一つの節目花に酌む 福山 植岡 義道
 卯の花の暗峠雨意の風 東大阪 梶田 高清
 塔影に重なる樹影夏はじめ 天理 松田 吉上
 あめんぼう影泳がせて光らせて 奈良 河村久美子
 姫女苑可憐に広げゆく陣地 名古屋 山口こひな
 薔薇飾る母百歳の誕生日 芦屋 山口 弘子
 母を待つ夕日の中のしやぼん玉 福岡 工藤 友子
 山よりの水を大事にして田植 熊本 渡邊佳代子
 讚美歌のマーガレットを渡りゆく 東京 黒島 流世
 海うららアンパンマンの電車行く 岡山 山口喜代子
 草笛を吹き文学を志す 福岡 塚田 由美
 納骨を終へ朝顔の種を蒔く 鹿児島 永里 瑞代
 都会へと戻る背中や駅薄暑 佐賀 山田 香織



編集後記

フランスの一輪ざしや冬の薔薇

子規

東京麹町のベルギー大使館で、会員の盛山正仁（現文部科学大臣）ご夫妻の句集の祝賀会が行われた記事が、本号に掲載され、掲句を思い出した。子規の叔父加藤拓川は、子規の上京、新聞日本への就職、そして薄給で寝たきりの子規への物心両面の援助等、世話をした。ベルギー公使だった拓川から一輪ざしを大阪の展覧会で拝見したこともある。子規が元氣だったら、政治家になっていたらうと虚子は語っている。俳句と政界との縁は意外にある。

○虚子生誕一五〇年にあわせたオンライン講座のレポートを記事化しました。虚子記念文学館の展示とも連動するため、五月にはオンライン動画を再生しつつ、私もライブで講演をしてみました。ご要望があれば、こういう形のオンライン録画の活用も考えています。遠慮なくお声かけください。

○九月には、第三回のオンライン講座も行います。「ホトトギス」の絵は、美術史の観点からも光が当たっています。百年前のパンデミック後の世界的インフレの折、「ホトトギス」を刷っても刷っても儲からない虚子は、自らの揮毫と「ホトトギス」に縁のあった画家の作品を注文販売することで、経営難を乗り切っています。変動期の混沌にある世界の下、俳句にかかわる我々も、「俳諧自由」であるだけでなく、「俳句を伝える者は自由」という発想が必要な時代に居合わせているのかも

しれません。

○協会賞の受賞者のインタビューを、今号と来月号に掲載することにしたしました。はじめての試みです。隔月で開催している編集委員会も、活発な意見交換がなされ、新しい企画が提案されつつあります。今後は、紙媒体だけでなく、SNS等と連動した発信の方法をも模索する予定です。（井上泰至）

花鳥諷詠八月号（通巻第四三七号）

定価一、〇〇〇円 但し、本代は年会費を含む

年会費一〇、〇〇〇円

令和六年八月一日

発行人 岩 岡 中 正

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二一八九

シャンブル笹塚二一B一〇一

電話 〇三三四五四五一九一

FAX 〇三三四五四五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇七七一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一一九二